

ジョン・ダンの『ラ・コロナ』の偏りについて

坂本晃平

I

ジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)の『ラ・コロナ』(*La Corona*, c. 1607)は、7篇のソネットからなるソネット連作(sonnet sequence)の形式で書かれた作品である。本作品は、そのタイトルが示唆する通り、各ソネットの最後の行が次のソネットの最初の行で繰り返され、やがて最後のソネットの最終行が扉のソネットの冒頭で繰り返されることによって、一つの円環を作り上げているところに最大の特徴がある。また、扉のソネットを除き、2番目以降の各ソネットは、それぞれ順に「受胎告知」(“Annunciation”)、「降誕」(“Nativitie”)、「神殿」(“Temple”)、「磔刑」(“Crucifying”)、「復活」(“Resurrection”)、「昇天」(“Ascension”)というタイトルが付けられている。それゆえ、本作はイエスの生涯を時系列順に追う詩作品だと考えられてきたが、「神殿」と「磔刑」の間に位置し、福音書の記述の大半を占めるイエスの宣教活動についてはほぼ何も取り上げられていない。このため、『ラ・コロナ』の描き出す円環には隔たりがあるとする議論がしばしば行われてきた。本邦における稀少な先行研究の中でも、例えば本堂知彦は「第4のソネットの『神殿』においてまだ12歳であったイエスは、第5のソネット『磔刑』で早くもその死を迎えることになる。イエスの生涯を考えると、その死に至るまでの数々のエピソードが全て省略されてしまっているわけで、連作全体の構成としては、やや偏りがあると言える」(「その2」97)との指摘を行なっているが、実のところ海外の『ラ・コロナ』の研究も、そのかなりの部分がこの「偏り」の解決を目指したものとして整理可能である。

批評史上初めてこの問題を提起し、その理由の説明を試みたのは、ヘレン・ガードナー(Helen Gardner)による1952年の編著 *John Donne: The Divine Poems* であった。彼女はその概論の中で、ダンの元カトリック教徒としての出自を重視し、“reference to [the Fifteen Mysteries of the Rosary] explains at once why Donne would find it natural to pass directly from the Finding in the Temple to the Events of Holy Week” (xxii) と、ロザ

リオの祈りにおけるいわゆる「マリア十五玄義」の並びの順序に、イエスの宣教活動が省略されていることの決定的な理由を見出した。直後の1954年、ルイス・L・マーツ(Louis L. Marts)も、聖母子の人生を6段階に分けるイエズス会士の著作との比較の上で、“the meditations of the corona may have exerted a very strong formative influence on the construction, divisions, and general procedure of Donne’s sequence” (110) と示唆し、英国におけるロザリオの祈りの様式と『ラ・コロナ』の出来事との間に並行関係があることを主張した。

しかしながら、これらのカトリック的な読解に対する反対意見も存在する。その嚆矢となったのが、1960年の A・B・チェインバーズ(A. B. Chambers)による研究である。彼は“*La Corona* quite clearly devotes itself to Christ and not to such specifically as the Marian material as the Mysteries of the Virgin” (212-3) と、ロザリオの祈りとの関連を見るマリア中心的な読みに対し強い難色を示した。チェインバーズはむしろ、「神殿」のソネットにおいて“the connection [. . .] between Jesus in the Temple and the whole of Christ’s work” (216) が描かれているために、これがイエスの地上における伝道と奇跡行為の要約になっていると解釈すれば「神殿」から「磔刑」への飛躍の問題は解決すると考えたようである。この研究は、そもそもなぜイエスの宣教行為が要約されたのかについての十分な考察を欠いてはいるものの、以降の批評に大きな影響力を及ぼす事になった。例えば、ジョン・ナニア(John Nania)と P・J・クレンプ(P. J. Klemp)は、1978年に、『ラ・コロナ』が7篇のソネットからなることが“creates a situation in which one sonnet is placed in a central or axial position” (50) と指摘した上で、その対称軸となるべき位置にあるのが““Temple,’ the central sonnet” (51) であると論じ、構造の面からチェインバーズを補足する研究を行った。R・R・ダビンスキ(R. R. Dubinski)による1980年の研究も、カトリックが理解するところの祭司かつ王としてのキリストの職務に、預言者としての職務をも加えるプロテスタントの「キリスト三職務」の教理を踏まえた上で、「神殿」のソネットの中に“an anticipation of Christ’s prophetic and teaching role that will be completely fulfilled in his public ministry” (205-6) を見出すことができると主張しており、チェインバーズの要約説の流れに位置づけられる。

しかしながら、ダビンスキーが『ラ・コロナ』における預言者としてのキリストの職務を強調すればするほど、キリストの宣教活動の場面が割愛されたそもその理由についての謎を深めるばかりであるように思われる。

その一方で、『ラ・コロナ』にカトリック性を見出す立場を引き継ぐ新たな批評は、モーリーン・サバイン (Maureen Sabine) による1992年の著作 *Feminine Engendered Faith* を待つことになった。この研究の新規性は、当局の弾圧に晒されたカトリック信徒らの信仰の実践において、ロザリオの祈りを主導する立場にダンの親族があった可能性を明らかにした点にある。その上で『ラ・コロナ』のテキストの中に隠蔽されたマリア崇拝の要素を見つけ出そうとする試みが続くものの、結局は彼女もダンが最終的にはマリア崇拝から “shied away” (57) したことを認めざるを得ない。さらに “When Donne finally ceased his refrains of fealty to Mary, he dissociated himself from a Woman who periodically led wayward man back to Christ and away from blame” (58) という結論の歯切れの悪さからも、たとえ「マリア十五玄義」の並び順によって「神殿」から「磔刑」への飛躍を説明することが可能であるとしても、マリア崇拝に固執することで『ラ・コロナ』の全体性を見落としかねないように思われる。

以上が、「神殿」と「磔刑」の間の断絶という観点から『ラ・コロナ』の研究状況を整理したものであるが、本作品にロザリオの祈りやマリア崇拝を読み込もうとする姿勢については、やはりチェーンバーズが指摘した通り、その十分な根拠をテキストから得ることはできないように思われる。対する要約説についても、たとえ「神殿」のソネットがイエスの宣教活動の要約を行なっているとしても、なぜそれが略述されねばならないのかという核心を外しているために、問題を一段階後退させたに過ぎない。従って、『ラ・コロナ』研究の進展のためには、新たな観点から『ラ・コロナ』の偏りに関する問題を再検討することが要請されていると言えよう。

ところで、そもそも論ではあるが、『ラ・コロナ』の語り手の主眼はイエスの生涯を物語ることにはなかったのではなかろうか。というのも、「神殿」と「磔刑」の間の地上のイエスに関する事実上の沈黙という問題以外にも、「受胎告知」と「降誕」のソネットにおいて、胎児あるいは嬰兒であるイエスは、なんら積極的な活動を果たすことができてないからである。言い換え

ると、イエスの主体的な営為が描かれ代りに、語り手がイエスを神として告白する神学的言辞に紙幅が割かれていると言える。加えて、「磔刑」に続く「復活」と「昇天」のソネットの場合にも、確かにイエスの復活と昇天への言及も僅かながら行われてはいるものの、それよりもはるかに語り手自身の復活と昇天の方が問題とされているという点も見逃すことはできない。すなわち、神による救済の方により大きな関心が寄せられていると言えるのである。

従って本稿は、『ラ・コロナ』がイエスの生涯を語ろうとしているという前提に留保をつけつつ各ソネットを検討し、『ラ・コロナ』全体を再読する。そのため『ラ・コロナ』というソネット連作が、四福音書のイエス伝承から逸脱している部分にこそ注目してゆく。このようにして新たな視座から考察を加えることで、イエスの宣教行為が割愛され、それによって『ラ・コロナ』が偏らなければならなかった根拠を明らかにすることが、本論の目指す到達点となる。

II

『ラ・コロナ』がキリスト教の著作物の中から、どういったものを引用あるいは参照しているのかという問いは、本詩作品をどのような信仰の文脈に位置づけると良いのかを教えてくれるだろう。まず、キリストの人生における具体的な出来事の名称が与えられていない扉のソネットについては、古くは “This first last end” (1. 11) が、キリスト教の黙示文学における “I am Alpha and Omega” (Rev. 1:8, 11) という神の言葉を踏まえていることについてのガードナーの指摘(58)がある¹。本邦においては、扉のソネットを締めくくるカプレット(couplet)、すなわち “’Tis time that heart and voice be lifted high, / Salvation to all that will is nigh” (1. 13-4) に、『ロマ書』13:11や『第二コリント書』6:2で述べられたパウロ神学における終末待望(加藤 6)を見出す見解もある。そうであるのならば、“But what thy thorny

¹ 本論文における英訳聖書からの引用は全て『ジュネーヴ訳聖書』(*The Geneva Bible*)による。これは、(1611年の『欽定英訳聖書』の出版以後の年代も含め)非常に多くの機会でダンが『ジュネーヴ訳』を用いたという事実が報告されている(E. M. Simpson and G. R. Potter, X, 326-8)からである。

crowne gain'd, that give mee, / A Crowne of Glory, which doth flower
always” (1. 7-8) という部分には、“we see Iesus crowned with glory and
honour, [. . .] through the suffering of death, that by Gods grace hee might
taste death for all men” (Heb. 2:9) というパウロらによる書簡の響きや²、新
約聖書が繰り返し説くところの神が終末において義人に与える “an
incorruptible crowne of glory” (1 Pet 5:4) を希う詩人のペルソナの姿を認
めることも可能であろう³。要するに、語り手は終末を待望し、また終末が
到来した時に栄光の冠を神から受けることができるように、祈りと賛美とに
努めているのである。このように、『ラ・コロナ』の導入にあたるソネットにお
いて、福音書に見られるイエスの言行録ではなく、パウロ書簡などが表明
しているキリスト解釈と救済論がまず主題化されているという事実は注目
に値する。これはダイアン・チェインバーズ (Diane Chambers) が、扉のソ
ネットについての議論の最後に “The remaining six sonnets [. . .] show
how this salvation is accomplished through the incarnation, death, and
resurrection of Christ” (161) と述べる通り、『ラ・コロナ』が提示するイエス
の生涯が全て救済論との関係で読まれなければならないということ在意
味している。

さて、2番目のソネットの「受胎告知」は、そのテーマから『ルカ伝』1:2
6-38に取材しているのは明白である。そしてこのソネットにおいては、
「語り手がその瞑想のうちに、ガブリエルの立場に身をおいて」(堂本「そ
の1」91)、マリアに対して、“yea thou art now / Thy Makers maker, and
thy Fathers mother” (2. 11-2) と、彼女が大文字の創造者かつ大文字の父
の母、すなわち神の母となったことを告げている。しかしながら、福音書
記者に従うのであれば、彼女が孕んだ存在はあくまで “the Sonne of the

² パウロ「ら」と言うのは、ここで引用した『ヘブライ書』については「パウロ書簡群」
の中でもその真筆性について疑われ、今日いわゆる「擬似パウロ書簡」の一つと
して分類されているからである。なお、ダンの生きた時代は近代聖書学の発展以
前でこそあるが、『ヘブライ書』についてはテルトゥリアヌスやオリゲネスら教父もそ
の筆者をパウロであると認めていなかった。また宗教改革期においても、マルティ
ン・ルターはパウロを『ヘブライ書』の著者とは見做していなかった。

³ 神が義人に与える栄冠のイメージについては、本文中の引用のほかにも、『1コリ
ント書』9:25、『2テモテ書』4:8、『ヤコブ書』1:12、『黙示録』2:10などを参照。

most High” (Luke 1:32) として告知されており、明示的に神その人であるとはされていなかった。それゆえ、431年開催のエフェソス公会議 (Concilium Ephesinum) に至ってようやく正統性が確認された「神の母」 (Theotokos) というマリアの称号を、ダンはこのにおいて援用していることになる。ところで、この称号の是非が公会議にかけられたそもその理由は、マリアを「神の母」と呼び習わすことの拒否がキリストの神性を否定することと同義であると看做され問題視されたから (McGrath 223) であった。この事実から翻って考えても、詩人のペルソナは、マリアを「神の母」と呼ぶことによって、福音書の記述に後世の神学議論を持ち込み、それによって彼女の子宮に宿ったイエスを出生以前のうちから神であると宣言しているということになる。

次に、3番目の「降誕」のソネットについては、聖家族に宿がなくイエスが厩で誕生したという『ルカ伝』2:7を踏まえた記述もあるが、基本的には『マタイ伝』の第2章に取材をしていると言えるだろう。とは言え、このソネットにも、イエスの出生について該当する福音書記述以外からの神学的議論が持ち込まれている。すなわち、第1クオートレイン、

*Immensitie cloistered in thy deare wombe,
Now leaves his welbelov'd imprisonment,
There he hath made himself to his intent
Weake enough, now into our world to come;*

(3. 1-4)

には、パウロの歌う有名なキリスト讃歌 “[Christ Jesus] being in the forme of God, thought it no robbery to be equal with God: But he made himselfe of no reputation, [...] and was made like vnto men, and was found in shape as a man” (Philip 2: 6-7) の響きがある。詩人のペルソナは、このパウロによる「神の自己限定」(Kenosis) の教理をパラフレーズして歌い、そうすることによって、誕生したイエスを神であると重ね重ね宣言しているのである。

以上「受胎告知」と「降誕」のソネットで行われている、イエスの人生を伝記的に描く福音書によるイエス伝承にキリスト論を挟んでいく語り方は、

4番目のソネットである「神殿」でも続けられている。このソネットは、『ルカ伝』2:41-50に描かれる、エルサレム神殿でイエスが律法学者たちと討論しているところを、マリアとヨセフが見出す場面を描いている。

*With his kinde mother who partakes thy woe,
Joseph turn backe; see where your child doth sit,
Blowing, yea blowing out those sparks of wit,
Which himself on those Doctors did bestow;
The Word but lately could not speak, and loe
It suddenly speaks wonders, whence comes it,
That all which was, and all which should be writ,
A shallow seeming child, should deeply know?*

(4. 1-8)

ここで読者と語り手が、イエスの両親とともに目撃している事象は、言葉が肉となったことをキリスト自身の活動で裏書きしている(214)という A・B・チェインバーズによる総括の通り、未だ12歳にすぎない(『ルカ伝』2:42)マリアの子イエスが“all which was, and all which should be writ”についての全知の叡智を披露するという行為でもって、自身の神性を証明している場面である。ここで、チェインバーズが軽い言及で済ませている内容を敷衍すれば、この「神殿」の場面は、大文字の言葉“Word”という語彙の使用が強く示唆する通り、『ヨハネ伝』冒頭の“In the beginning was that Word, and that Word was with God, and that Word was God”(John 1:1)で始まるキリスト讃歌を強く意識していると言える。さらに言えば、この言葉は受肉し(『ヨハネ伝』1:14)人間となり、イエス・キリストとして我々に恵みと真理とをもたらした(『ヨハネ伝』1:17)のであるから、詩人のペルソナは、“Blowing, yea blowing out those sparks of wit”するイエスの姿に、神による神の啓示(『ヨハネ伝』1:18)を見出しているのである。すなわち、「神殿」のソネットで描かれているのは、キリストを通した神の自己開示(『ヨハネ伝』12:45、14:9)の様子なのである。それを目撃するからこそ、語り手は“His Godhead was not soul to his manhood”(4. 9)という、「カルケド

ン信条」の一節(「この唯一のキリスト、御子、主、獨子は、二つの性[神性と人性]より(二つの性において)まざることなく、かけることなく、分けられることもできず、離すこともできぬ御方として認められねばならないのである。)」を思わず否定神学の言葉遣いで、マリアより生まれ肉をまとった人間イエスが神でもあるという信仰を告白せずにはおけないのである。

さて、以上の「受胎告知」、「降誕」、「神殿」のソネットは、いずれもイエスの洗礼に先立つ出来事である。従って、キリストの公生涯が始まりさえしないうちから、詩人のペルソナは、イエスは人でありかつ神であると繰り返し解釈し、それを読者に対して繰り返し宣言していると言える。であるからこそ、『ルカ伝』におけるイエスの言葉 “knew yee not that I must goe about my Fathers businesse?” (Luke 2:49) を踏まえつつ、「神殿」のソネットがイエスの地上における宣教の開始を、

But as for one which hath a long task, 'tis good,
With the Sunne to beginne his businesse,
He in his ages morning thus began
By miracles exceeding power of man.

(4. 11-4)

と宣言する(A・B・チェインバーズ 216)時、『ルカ伝』においてはその後明かされている “But they [Mary and Joseph] vnderstood not the word that he spake to them” (Luke 2:50) という、「神殿」のソネットにおける神の自己開示が人間には理解できなかったことを意味しかねない事実は、『ラ・コロナ』においては必ず割愛されていなければならないのである。

以上のことは、「神殿」と「磔刑」のソネットの間の断絶の部分に位置する、イエスが地上で行い、そして福音書記者らによって記録された宣教行為の数々は、詩人のペルソナがイエスを神として認識し、かつそのことを読者に伝達するために必要とされていないということを示唆する。これは、(17世紀イングランドを生きたダンと同じく)そもそも生身のイエスを知らなかったこともあつてか、“though wee had knowen Christ after the flesh, yet now henceforth knowe we *him* no more” (2 Cor 5:16) と述べ、ガリラヤの地

で神の国について述べ伝えて回った生身のイエスの水平方向の円運動よりも、神であった彼が人間となり自らを低め、それゆえ十字架に架けられたのちは高举され栄光のうちにある(『フィリピ書』2:6-11、『ヘブライ書』2:6-9)という、キリストの垂直方向の円運動に集中するパウロらの語りに似ている。すなわち、『ラ・コロナ』の語り手がそもそも問題にしようとしているのは、福音書の中のイエス伝承が証言する地上に生きたイエスの営為ではなく、パウロらとその神学的書簡で遂行した、神がキリストにおいて何を行なったのかという議論に近い⁴。それゆえ、神が救済のために受肉という形で人類史に介入し、十字架にかけられる形で贖罪死を遂げたという信仰こそが、扉のソネットに取り上げられて以来ずっと語り手の念頭にあるのである。本堂は、ソネット全篇にわたる精緻な分析の末に、「7編のソネットが循環し、一つの円環をなすという全体の形式ばかりではなく、その円環を構成する個々のソネットの内部にもまた、円環あるいは『初めにして終わり』というテーマを象徴するような表現が見られる」(「その2」105-6)といみじくも結論づけているが、『ラ・コロナ』の円環は、他ならぬ神を形而上学的に象徴するだけでなく、それがキリスト降誕に始まり、贖罪死の末の昇天で終わる上下の運動によって歴史に介入した軌跡を描いていると言えるのである。

このように考えると、「神殿」のソネットから「磔刑」のソネットへの飛躍は何ら不思議なことではない。と言うのも、「受胎告知」、「降誕」、「神殿」のソネットは神が天から降り、人間に対し自己開示を行うまでのさまを描いているのであり、上にいる神が下にいる人間に対して信仰すべき対象を示す運動であった。反対に、それに続く「磔刑」、「復活」、「昇天」のソネットはキリストが磔にされて天に昇ってゆく下から上への運動であり、これによって天上と地上を往復する円環が完成するからである⁵。また、地上

⁴ 本稿ではイエス・キリストを、彼の地上に生きる宗教家として人間としての性格が強く意識される場合にはイエス、神(の第二位格)としての性格が強く意識される場合にはキリストとして言及している。

⁵ それゆえ、ナニアやクレンプの提出した構造分析は誤っている。むしろ、『ラ・コロナ』の対称軸は、「神殿」というよりもむしろ扉のソネットにあり、それを中心として上下の運動の対比があるということができよう。

から天上への復路は、救済論的観点から見れば、キリストのみが神の元に還ってゆく運動ではなく、義人を神の元に引き上げる運動でもあることが重要である。それゆえ、自らもその救済にあずかれるようにと祈る詩人のペルソナは、これから論じていくように、天上に還っていったキリストを下から求める信仰心を、『ラ・コ罗纳』の後半において強く表明することとなる。

だからこそ、語り手は5番目のソネットである「磔刑」で地上のイエスによる奇跡行為を要約して述べるにあたって、

*By miracles exceeding power of man,
Hee faith in some, envie in some begat,
For, what weake spirits admire, ambitious, hate;
In both affections many to him ran,*

(5. 1-4)

と、彼に対する人間の側の反応に焦点を当てるのである。ここで“faith”ではなく“envie”に囚われた人間がキリストを磔刑に処し、不信仰をその行為で示したのに対し、語り手は自らを信仰者として明示こそしないものの、“Now thou art lifted up, draw mee to thee, / And at thy death giving such liberall dole, / Moyst, with one drop of thy blood, my dry soule” (5. 12-4) と、十字架に架けられ天上へと帰還する運動を始めたキリストの方へと自らも寄せられるように、彼に直接語りかけて祈ることによって、自身の信仰を態度として示しているのである。

6番目のソネットである「復活」においては、詩人のペルソナはキリストの復活という事件それ自体を福音書の記述に従って描き出そうなど初めからしていない。そうではなく、キリストの死が人類、いやむしろ自分自身にとって持つ救済論的意義について思弁を展開している。殊に“*And life, by this death abled, shall controule / Death, whom thy death slue*” (6. 5-6) という一節には、“*The last enimie that shall be destroyed, is death*” (1 Cor 15:26) という、終末における人間の復活を預言するパウロの声が響いている。すなわち、キリストの死を既に過去のこととして生き、それが人類に

死後の甦りをもたらすことを信じる者の声なのである。そして語り手が神の救済に与るための条件は “If in thy little booke my name thou'enroule” (6.8) だけであり、パウロに引きつけて言うのであれば、彼が『ロマ書』の第9章で展開する神の自由な選びについての議論に接近しているとも言えよう。ここにおいて、詩人のペルソナは、自分自身の救済の可否の全てを神に委ねてしまっているものの、決して悲観することはない。むしろ、神を信頼し、神に全てを委ねるからこそ、“May then sinnes sleep, and deaths soone from me pass, / That wak't from both, I againe risen may / Salute the last, and everlasting day” (6. 12-4) と、世界の終末とそれに伴う自分自身の復活とが早まることを、ますます力強く祈るのである。従って、この一篇は、これまで一応はキリストの生涯に関する出来事を描いてきたソネット連作の中にありながら、キリストではなくむしろ語り手自身の復活のことばかりに集中しているという、不思議と批評家の関心をあまり惹いてこなかった特徴を持つ。「復活」のソネットは復活したキリストに対する賛美というよりも、他ならぬ自分自身もそれによる救済に与ることができるようにとの祈りなのである。本ソネット連作がキリストの復活に差し掛かった「復活」のソネットで、自分自身の復活について語ることで、詩人のペルソナは、キリストの死からの復活という下から上への動きに、自らが復活し天国へと入る上方向の動きを重ね合わせ、そうすることによってキリストと一致し救済に与ることができるようにと祈っているのである。

この特徴は、最後のソネットである「昇天」へと引き継がれてゆく。このソネットにおいても、タイトルの順序から予期される内容に反して、1世紀のパレスチナにおけるキリストの昇天を『マルコ伝』と『ルカ伝』の記者が記録したように描いているのではない。そうではなく、詩人のペルソナは “the last and everlasting day” (7.1) という冒頭の名詞句の通りに、来るべき最後の審判の日を想像して語っているのである。従って、援用されているイメージが、使徒たちが目撃したところの、雲とともに天に昇ってゆく復活したイエスの姿(『使徒行伝』1:9-10)を思わせるにせよ、以下で問題になっているのはイエスの一度目の昇天ではない。

Behold the Highest, parting hence away,

Lightens the darke clouds, which hee treads upon,
Nor doth hee by ascending, show alone,
But first hee, and he first enters the way.

(7. 5-8)

ここで、キリストが義人たちを引き連れていることから、詩人のペルソナが依拠しているのはむしろ『第一テサロニケ書』4: 16-7でパウロが描く、終末に再臨したキリストの二度目の昇天の様子であると言った方がより適切だ。そして終末が問題となっている以上、その眼目にあるのはキリストの二度目の昇天というよりも、キリストによって引き上げられる人間たちの昇天、言い換えれば救済である。そしてそもそも、語り手は自らの救済を望んだからこそ、『ラ・コロナ』の祈りをここまで編んできたのではなかろうか。だからこそ、この詩の語り手が終末に思いを馳せ、『ラ・コロナ』の最後に次の力強い祈りにして賛美の歌を歌う時、彼は一人称単数の代名詞を繰り返し用いているのである⁶。

O strong Ramme, which hast bayyer'd heaven for mee,
Mild lambe, which with thy blood, hast mark'd the path;

⁶ 従って、『ラ・コロナ』においてところどころ語り手以外の信仰者の存在が言及されているとはいえ、D・チェインバーズの論文(“Salvation to All That Will Is Nigh: Public Meditation in John Donne’s ‘La Corona’”)が、そのタイトルにおいても明白に打ち出しているところの、『ラ・コロナ』の中に信仰共同体を強く読み込もうとする姿勢には疑義が生じる。その理由としては、上で論じた通り、『ラ・コロナ』は、「磔刑」で語り手が直接キリストに呼びかけて以降、個人的な性格を強めていくものであることがまず挙げられる。加えて、このソネット連作に“my muses white sincerity” (1. 6) や “if thy holy Spirit, my Muse did raise” (7. 13) という表現が出現することからも、この作品はダンが詩人としての自意識を持って書いたことが明白だからである。最後に、そもそもこのようにして織り上げた詩を、語り手は “*Deign at my hands this crowne of prayer and praise*” (1. 1; 7. 14) と、冒頭と最後に繰り返し神に手ずから対して差し出しているのであって、この神と語り手との一対一の関係に第三者が入り込む余地はないように思われるからである。また、まさにこの点においても、『ラ・コロナ』はカトリック的であるというよりもプロテスタント的な詩であると言えるのではなかろうか。

Bright torch, which shin'st, that I the way may see,
Oh, with thine owne blood quench thine owne just wrath,
And if thy holy Spirit, my Muse did raise,
Deign at my hands this crowne of prayer and praise.

(7. 9-14)

III

以上の議論から、『ラ・コロナ』はマリアの人生でもキリストの人生でもなく、むしろ詩人のペルソナの救済を問題にしているということが明らかになったと言えよう。この見解は、救済論的観点から見たキリストの十字架の意義を『ラ・コロナ』が強調しているという事実によっても裏書きされている。これは一つには、D・チェインバーズによる “The emblematic imagery at the end of ‘Crucifying’ and beginning of ‘Resurrection’ reminds the persona and reader of the need for salvation through the crucifixion and resurrection” (168) という、「磔刑」と「復活」にまたがるキリストの血、すなわち十字架上の犠牲の意義が強調されているという指摘の明らかにするところである。この血のリフレインの他にも、詩人のペルソナは決定的な場面で他ならぬ十字架を繰り返し文字通り描き出して見せることで以って、キリストの犠牲に思いを馳せている。例えば、「磔刑」のソネットの詩行においては、

Loe, where condemned hee
Bears his owne crosse, with paine, yet by and by
When it bears him, he must bear more and die.

(5. 9-11)

の部分に二つのカイアズマス(chiasmus)、すなわち、

Bears his owne *crosse*, with paine, yet by and by
When *it* bears him

と、

When it bears **him**, **he** must bear more and die.

というカイアズマスが描かれている。次に、「昇天」のソネットには、

But first **hee**, and **hee** first enters the way.

(7. 8 emphasis mine)

というカイアズマスが存在する。最後に、扉のソネットには、

The ends **crowne** our works, but thou **crown 'st** our ends,

(1. 9 emphasis mine)

という大きなカイアズマスが見られるのである⁷。「磔刑」のソネットにおいては、まさにキリストが磔にされた瞬間に、他ならぬキリスト(he/him)と十字架(crosse)とが互いを背負い合い、耐える(bear/bears)ことで以って十字架を描き出している。この十字架は語り手のみならず、彼に“Loe”と呼びかけられた読者らによっても目撃されることとなるだろう。また「昇天」のソネットにおいては、キリストが十字架を背負ったために、すなわち、我々人間の罪を代わりに償ったがために、彼に従い義とされた人々が復活し、昇天したキリストの後に続いて天の国に入ることができるという発想を見出すことができる。最後に、救済論をテーマとして提示していた初めにし

⁷ カイアズマスとは、交差配列法とも呼ばれ、ギリシア文字 χ (カイ)に由来するその名が示す通り、詩行における要素を ABBA の順で並べることによって、襷掛けのように X 字(十字)の形を作り出す修辞技法のことを言う。以上列举した『ラ・コ罗纳』に見られるカイアズマスの中では、「磔刑」のソネットの9-10行目に現れるカイアズマスが最も視覚的にわかりやすい例であろう。なお、ダンがカイアズマスをキリスト教の十字架の象徴として用いている他の例については、ドゥニヤ・ムハンマド・ミクダド・イジャーム(Dunya Muhammad Miqdad I'jam)とザハラ・アドナン・ファディル(Zaharaa Adnan Fadhil)が、論文“Chiasmus as a Stylistic Device in Donne's and Vaughan's Poetry”の中で、カイアズマスの多様性とともに論じている研究が存在する。

て終わりの扉のソネットにおいては、その中心とも言えるセステット (sestet) 冒頭の9行目において、大きな十字架を象徴的に描き出しているのである。従って、『ラ・コロナ』の円環の全体にわたって、堂々たる十字架が屹立しているのだ。そして、この扉のソネットの大きなカイアズマスが “end” と “crown” という単語によって描き出されていることも非常に意義深い。なぜなら、使徒パウロが、

For I am now ready to be offered, and the time of my departing is at hand. I haue fought a good fight, and haue finished my course: I haue kept the faith. *For* hencefoorth is laid vp for me the crowne of righteousnesse, which the Lord the righteous iudge shall giue me at that day: and not to mee onely, but vnto all them also that loue that his appearing.

(2 Tim 4:6-8)

と述べているからである。すなわち、十字架の上で「荆冠」をかぶり、「贖罪死」したキリストの再臨を心から待ち望む信仰心を持っていれば、たとえ我々がその前に「死」んだとしても、来るべき「終末の日」に、神から「義の冠」を受けることができるというものこそ、彼の信仰だったからである。

さて、これらカイアズマスが描き出すそれぞれの十字架がこのように救済を象徴することからも、『ラ・コロナ』の語り手の主眼が、地上におけるイエスの生涯を語ることはなかったことはますます明白である。むしろ『ラ・コロナ』の中心は、キリストが受肉し、死と復活で人類に救済をもたらしたという信仰にある。そしてこの信仰を、天上と地上をキリストが往復した円環を描き出すことで表明するにあたって必要な限りにおいて、地上のイエスの生涯を辿っていたのである。その結果、彼の生涯の序盤と終盤に関心が集中することになるのは極めて自然なことだと言えよう。そして、この円運動が人類にもたらした救済を語り手が讃えて、それに与ることを祈るからこそ、言い換えると、自らの救済を求める詩人のペルソナの信仰心が『ラ・コロナ』として発露したからこそ、このソネット連作は一番初めと最後

の詩行で “*this crowne of prayer and praise*” (1.1; 7.14) として神に捧げられているのである。

引用文献

- Chambers, A. B. “The Meaning of the ‘Temple’ in Donne’s ‘La Corona’.” *The Journal of English and Germanic Philology*, vol. 59, no. 2, 1960, pp. 212-7.
- Chambers, Diane. “‘Salvation to All That Will Is Nigh’: Public Meditation in John Donne’s ‘La Corona’.” *Explorations in Renaissance Culture*, vol. 19, no. 1, pp. 161-72.
- Donne, John. *John Donne: The Divine Poems*, 2nd edn. Edited by Helen Gardner. Oxford UP, 1978.
- Dubinski, R. R. “Donne’s ‘La Corona’ and Christ’s Mediatorial Office.” *Renaissance and Reformation / Renaissance et Réforme*, New Series / Nouvelle Série, vol. 4, no. 2, 1980, pp. 203-8.
- The Geneva Bible: The Annotated New Testament, 1602 Edition*. Edited by Gerald T. Sheppard. The Pilgrim P, 1989.
- I’jam, Dunya Muhammad Miqdad and Zahraa Adnan Fadhil. “Chiasmus as a Stylistic Device in Donne’s and Vaughan’s Poetry.” *Journal of Education and Practice*, vol. 7, no. 26, 2016, pp. 43-52.
- Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. Yale UP, 1954.
- McGrath, Alister E. *Christian Theology: An Introduction*, 6th edn. Wiley Blackwell, 2017.
- Nania, John and P. J. Klemp. “Donne’s ‘La Corona’: A Second Structure.” *Renaissance and Reformation / Renaissance et Réforme*, New Series / Nouvelle Série, vol. 2, no. 1, 1978, pp. 49-54.
- Sabine, Maureen. *Feminine Engendered Faith: The Poetry of John Donne and Richard Crashaw*. Macmillan, 1992.
- Simpson, Evelyn M. and George R. Potter, eds. *The Sermons of John Donne*, vol. X. By John Donne. U of California P, 1962.
- 加藤芳子「Donne の ‘La Corona’」『札幌大学教養部紀要』第38号、1991年、

1-17頁。

「カルケドン信条」『キリスト教古典叢書第一巻 信条集 前篇』キリスト教古典叢書
刊行委員会訳、新教出版社、1955年、7頁。

本堂知彦「冠を編み上げる花 — ジョン・ダンの “La Corona” 再考(その1) —」
『北海道教育大学紀要第一部 A 人文科学編』第44巻、第2号、
1994年、85-96頁。

--- 「冠を編み上げる花 — ジョン・ダンの “La Corona” 再考(その2) —」『北
海道教育大学紀要第一部 A 人文科学編』第44巻、第2号、
1994年、97-106頁。